

校長室より

「二松から飛翔へ」

二松学舎大学附属高等学校
校長 鶴飼敦之

新年明けましておめでとうございます

明けましておめでとうございます。

本年の干支は「癸卯」です。物事の終わりと始まりを意味する「癸」と安全や温和、また、跳という意味の「卯」。この組み合わせからこれまでの努力が実を結び、勢いよく成長し飛躍する年になると言われています。同様に今まで培ってきた自身の力が試される年とも言われています。本校も創立80周年に向けて2023年を大きな飛躍の年にしたいと考えています。

さて、年末年始を含んだ冬休み、みなさんはどのように過ごしたでしょうか。今年は3年ぶりにコロナによる行動制限の無い正月となり、駅や空港に多くの人の姿が目立ったようです。暮れの30日に東京駅に出かけましたが、スーツケースを持つ家族連れが多かったようです。

私はいつものように年越しそばをいただきながら、大晦日は紅白歌合戦を楽しみ、元旦は早朝から地元の多摩湖で初日の出を拝みました。天気にも恵まれ、新年の新鮮さを感じられる初日を見ることができました。朝からは関西風の味噌仕立てで里芋や人参などが入った雑煮を食し、年賀状に目を通すとといった定番の正月を過ごしました。関東では江戸式のシンプルなお雑煮が多く、醤油のおすましに焼いた四角の餅を入れ、小松菜に油揚げ（鶏肉または蒲鉾）少々が一般的と聞きました。質素なのは、徳川家康が「貧しかったことを忘れず、年頭にはこの雑煮を食べよう」と決意したところから江戸中がそれに倣ったようです。

二日から三日はおせち料理をつつきながら、箱根駅伝をTV観戦するのが恒例行事です。紅白歌合戦には及ばないものの視聴率は30%近くと箱根駅伝は全国的な行事となっているようです。選手同士の駆け引きや自分個人との戦いを繰り広げるレースは毎年、胸を熱くします。

前を走る選手の姿・形は見えなくても、黙々と走るうちに、先の選手の背中がうっすら見え始めると、そこから更にギアが入って、どんどん差が縮まっていくというケースがあります。人間は漠然とした目標より、「具体的な目標が視界に入った時に今まで以上の力が身体に宿るものだ」と改めて感じました。



また、集団で走る際には相手の息遣いや足音などを感じながら競い合っていく場面が多くありました。お互いに切磋琢磨することで自己ベストを目指してもてる力の100%を発揮することが可能になるのだとつくづく感じました。日々の学校生活の中でも、目標をもって、クラスや部活動の仲間と共に高めあう姿勢で臨んで欲しいと思います。

箱根駅伝を高校3年間に例えれば、1年生はこれから険しい山登りに徐々に向かい始める所、2年生は箱根の山を下り始め、これまでの頑張りの真価が問われる重要区間にさしかかった所、3年生に至っては、まさに最終区間、進路の決まった人も、これから入試本番という人もいるでしょうが、ゴールテープがうっすらと見え始めたことでしょう。

初詣で引いたおみくじは「小吉」でした。コロナ感染で翻弄された2020年を『大凶』とするならば、21年から昨年にかけてはやや回復の兆しが見えたものの「凶」。これから感染数が減っていくのか、それともまだまだ増えていくのか、不安な思いは誰もが感じていることと思います。年明けも東京では1日で20000万人を越える感染者の数が報道されています。ただ、今を『凶』と捉えれば、あとは吉に向かっていくだけ、そんな思いを抱きつつ、新年のスタートが切れればと願っています。短い3学期ですが、それぞれが自己ベストを目指して必死に走り抜く、ぜひそんな3学期にしてください。(3学期始業式より)

保護者、関係者の皆さまにおかれましては、つつがなく新年を迎えられたこととお喜び申し上げます。本年も引き続き、本校の教育活動にご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



吹奏楽部 部内発表会 in 中洲記念講堂

12月26日(月)吹奏楽部の「アンサンブル部内発表会」が中洲記念講堂で開催されました。翌27日、28日の府中芸術の森劇場での「アンサンブルコンテスト」を控え、20名ほどの保護者の皆様をご招待して、10組が日頃の練習の成果を披露してくれました。顧問斎藤先生が袖で見守る中、各パートや学年ごとに少し緊張した面持ちでパート・曲の紹介をし、演奏スタート。講師の高村先生もピアノで参加してくださいました。野球部の応援演奏とはまた違い、楽器のハーモニーが素敵でした。演奏終了後の楽屋では、和んだ雰囲気でもっとした感じが漂っていました。

年末に演奏を聴きながらリラックスできる機会はなんと心地よいのでしょうか。吹奏楽部の皆さんに感謝。そして益々のステップアップを期待しています。

